

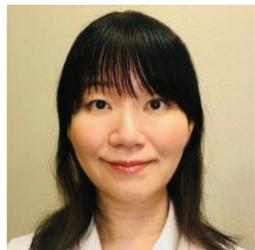


THE MAUREEN AND MIKE MANSFIELD FOUNDATION

マンズフィールド-PhRMA 研究者プログラム 2024 参加者略歴

喜多 久美子

聖路加国際病院 乳腺外科 副医長



喜多久美子は、乳腺専門医かつ臨床遺伝専門医として聖路加国際病院乳腺外科副医長として従事している。遺伝性乳癌卵巣癌診療ガイドライン委員会の乳腺領域リーダーであり、日本乳癌学会のリスク予測研究班の班員でもある。研究面では、乳癌に関する臨床研究の企画と実施、共同トランスレーショナル研究プロジェクトに従事し、臨床試験・治験の施設代表者および多施設共同臨床試験グループの施設代表を務めている。また、現在 MD アンダーソンがんセンターやハワイ大学のチームとの継続的なトランスレーショナル研究プロジェクトに従事している。喜多医師は横浜市立大学で医学博士号を取得し、聖路加国際病院で乳腺外科フェローシップを修了。その後、テキサス大学 MD アンダーソンがんセンターの乳腺腫瘍学講座でポストドクトラルフェローシップを修了した。

南澤 匡俊

信州大学医学部 循環器内科学教室 助教



南澤匡俊(MD, PhD)は信州大学医学部循環器内科学教室助教、ブリガム&ウイメンズ病院/ハーバード医学校リサーチコラボレーターとして現在勤務している。2007年に信州大学医学部を卒業し、信州大学医学部附属病院、信州上田医療センターにて内科レジデント、循環器内科フェローシップを修了した。2016年に虚血性心疾患、心不全、心臓超音波検査に関する研究テーマにて医学博士を取得。2017年～2021年に、ブリガム&ウイメンズ病院心臓血管内科部門(Scott D. Solomon 教授)にてポストドクフェローとして臨床研究留学。帰国後は信州大学医学部に戻り、2022年より現職。心不全治療薬の国内・海外治験に施設内の主任、分担研究者として参画している。

中山 東城

東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科脳神経病態学分野 特任准教授



小児神経学と遺伝学を専門にする研究医。国立精神・神経医療研究センター(NCNP)で小児神経学の研修を受け、理化学研究所で難治性てんかんに関する分子遺伝学の研究で博士号を取得。その後、ボストン小児病院でポストドクとして8年間勤務し、小児難治性てんかんの個別化核酸医薬創薬見プログラムに従事。2022年に東京医科歯科大学に移籍後、日本での N-of-1 薬剤発見研究プログラムの設立に向けて活動している。

小倉 浩一

国立研究開発法人 国立がんセンター中央病院 骨軟部腫瘍科/国際開発部門 研究企画室 医長



小倉浩一は、現在まで整形外科の中でも骨軟部腫瘍を専門とし、肉腫におけるゲノム解析の研究で医学博士を取得した。このような経験から、Memorial Sloan Kettering がんセンターにおいてポスドクを行い、Ewing 肉腫におけるゲノム異常の機能解析および治療標的の探索に関する研究を行った。現在は国立がん研究センター中央病院・骨軟部腫瘍科の医長として、外来や手術などの臨床業務に加えて、国立がん研究センター研究所や複数の製薬企業との共同研究として基礎研究、トランスレーショナルリサーチにも従事している。

岡崎 敦子

順天堂大学大学院医学研究科 難治性疾患診断・治療学 准教授



岡崎敦子(M.D., Ph.D., M.P.H.)は順天堂大学難治性疾患診断・治療学の准教授で、2005年に神戸大学医学部医学科を卒業し、その後大阪大学大学院医学系研究科で医学博士、英国マンチェスター大学で公衆衛生修士を取得している。彼女は循環器内科専門医および臨床遺伝専門医の資格を有し、マギル大学、ベイラー医科大学、ハーバード大学医学部、ロックフェラー大学でバイオインフォマティクス、生物統計学、遺伝統計学のスキルを学んだ。

彼女は遺伝統計、臨床遺伝、コンピューターサイエンスを統合し、ハミング距離を用いて候補バリエーションを絞り込む新規遺伝統計手法を開発した。同手法の臨床応用の1つは日本におけるミトコンドリア病コホートである。彼女はミトコンドリア病の長期予後と遺伝的背景の関係につき調査を行ってきた。彼女のグループはミトコンドリアにおけるエネルギー産生を増加させることで心機能を改善する薬剤も発見した。

沖田 康孝

大阪大学 医学部付属病院 未来医療開発部 特任教授



医療のイノベーションに大変関心があることから、現職では以下の3つの仕事を担当。第一に、R&D部門でのプロジェクトマネージャーを務めている。体外診断薬、低分子化合物、遺伝子治療、細胞治療など基礎研究の発見を実用化に結びつけるため約20のシーズを支援。今回の研修を通して、特にベンチャー企業の立ち上げ・支援について学びたいと希望している。次に免疫内科医として毎週70名程度の患者を診察し、さらに複数の臨床研究・治験に参画している。最後に研究者として、医療用人工知能の開発や、自己免疫疾患の病態解明を目指した基礎研究、コホート研究などの臨床研究を行う。目標は自己免疫疾患の診療の効率化と根治治療の開発であり、3つの役割を通してこのビジョンを実現しようとしている。

須藤 一起

国立研究開発法人国立がん研究センター中央病院 腫瘍内科/先端医療科医長 国際開発部門 TR 推進室室長 先進医療・費用対効果評価室長



2006年に新潟大学医学部医学科を卒業し、2006年に聖路加国際病院へ入社し、初期研修、外科専門研修を受けた。2012年に外科専門医を取得し、同年から消化管がんの研究のために MD Anderson Cancer Center の GI Medical Oncology へ Postdoctoral fellow として留学をした。2014年に留学を終え帰国する際には、がん薬物療法の臨床と研究を継続するため、国立がん研究センター中央病院に入職した。2017年までがん薬物療法専門医のトレーニングを行い、がん薬物療法専門医を取得し、同年から同病院の乳腺・腫瘍内科の医員として職に就いた。同時に希少がんセンターを併任した。さらに、2019年からは先端医療科を併任し、第1相治験にも関わるようになった。2020年からは国際開発部門 TR 推進室室長併任し、乳腺・腫瘍内科(現 腫瘍内科)の医長に昇進した。2021年からは先進医療・費用対効果評価室の室長併任、2023年には臨床開発推進部門医薬品開発推進部のゲノム医療開発推進室と医薬品開発室の併任をするようになった。婦人科がん、乳がん、泌尿器がん、肉腫などの希少がんの診療や研究に携わっている。

2006年に新潟大学医学部医学科を卒業し、2006年に聖路加国際病院へ入社し、初期研修、外科専門研修を受けた。2012年に外科専門医を取得し、同年から消化管がんの研究のために MD Anderson Cancer Center の GI Medical Oncology へ Postdoctoral fellow として留学をした。2014年に留学を終え帰国する際には、がん薬物療法の臨床と研究を継続するため、国立がん研究センター中央病院に入職した。2017年までがん薬物療法専門医のトレーニングを行い、がん薬物療法専門医を取得し、同年から同病院の乳腺・腫瘍内科の医員として職に就いた。同時に希少がんセンターを併任した。さらに、2019年からは先端医療科を併任し、第1相治験にも関わるようになった。2020年からは国際開発部門 TR 推進室室長併任し、乳腺・腫瘍内科(現 腫瘍内科)の医長に昇進した。2021年からは先進医療・費用対効果評価室の室長併任、2023年には臨床開発推進部門医薬品開発推進部のゲノム医療開発推進室と医薬品開発室の併任をするようになった。婦人科がん、乳がん、泌尿器がん、肉腫などの希少がんの診療や研究に携わっている。

寺田 参省

国立がん研究センター中央病院 国際開発部門 アジア連携推進タイ事務所 アジア連携推進タイ事務所長



2009年に東京慈恵会医科大学で医学士(MD)を取得し、2019年に博士号(PhD)を取得している。その後、2011年から2016年まで外科医をして働き、特に2014年からは胃がん手術を専門とした。2017年に EORTC にメディカルリサーチフェローとして留学し、ヨーロッパ規準の国際臨床試験の方法論を学ぶ。EORTC では、JCOG(日本臨床腫瘍研究グループ)と EORTC の間で複数の共同プロジェクトやイベントを提案・実施し、国際協力の重要性和意義を実感。また、がん患者の PRO(患者報告アウトカム)/QOL 研究にも従事しており、胃がんの QOL 質問票である EORTC

QLQ ST022 の改訂に関する国際共同研究の主任研究者でもある。

2019年には、ATLAS プロジェクトの一環としてタイのバンコクにアジア連携推進タイ事務所(APO)の設立を主導し、2021年9月にAPOの所長に任命される。2021年12月からバンコクに駐在し、アカデミア、規制当局、製薬業界など様々なステークホルダーとの連携強化と、ATLAS で構築したネットワークのガバナンス整備推進に貢献。

AMED・PMDA・経産省からのオブザーバー

吉田 愛

国立研究開発法人日本医療研究開発機構(AMED) ゲノム・データ基盤事業部 データ利活用推進課 調査役



これまでにデータ利用者として医療データを用いた研究に従事し、データ提供者として国において医療・介護データの二次利用の業務に携わってきた。データの利活用を通じて、医療の進歩や発展と異分野融合の研究に寄与していきたい。2017年8月より、AMED勤務。2022年4月より、ゲノム・データ基盤事業部データ利活用推進課の調査役として業務に従事している。国費を投じて産生されたデータが二次利用されるような枠組みやプラットフォームを構築する事業を担当している。本事業ではデータの二次利用だけではなく、異分野融合の研究の接点となることを目指す。

2015年8月-2017年7月(産業医科大学より出向)、厚生労働省老健局老人保健課の主査として、介護保険施設が保険者に請求する匿名化された請求書や要介護者のデータを格納する介護保険総合データベースを所管していた。この業務では、他のデータベースと連携する準備も実施した。2015年7月-2017年7月、産業医科大学医学部公衆衛生学教室の有期助教として、ビッグデータの解析を通じて亜急性期入院患者の入院実態を明らかにした。

現在、産業医科大学医学部公衆衛生学教室の訪問研究員として、研究を継続中。2015年3月まで東邦大学医学部公衆衛生学教室の博士課程に在籍し、単位取得満期退学。2008年3月に慶應義塾大学健康マネジメント研究科医療マネジメント専攻の修士課程を修了した。2006年3月に慶應義塾大学経済学部経済学科を卒業。

久保 秋穂

独立行政法人 医薬品医療機器総合機構 医薬品安全対策第二部、ATC 事業室、ワクチン等審査部、再生医療等製品審査部



2019年より、独立行政法人医薬品医療機器総合機構(PMDA)の医薬品安全対策第二部で調査員として勤務し、ワクチンや血液製剤の市販後安全対策業務に従事している。さらに、アジア医薬品・医療機器トレーニングセンターのプログラムコーディネーターとして、医薬品安全性監視に関するトレーニングコースを提供している。トレーニングコースを介して、薬事規制に対する相互理解の促進や、アジアをはじめとした海外との協力関係の強化を図っている。近年、業務の幅が広がり、2024年よりワクチンや血液製剤の審査業務にも従事。慶應義塾大学で薬学部の修士号を取得している。

現職の以前は、順天堂医院で約2年間薬剤師レジデントとして勤務し、小児薬物療法における幅広いトレーニング研修を積む。

幸寺 玲奈

経済産業省 商務・サービスグループ 生物化学産業課 課長補佐(再生・細胞医療・遺伝子治療担当)



令和2年に経済産業省に入省し、省エネルギー・新エネルギー部政策課にて、再生可能エネルギー関連政策や、省エネルギー政策の総合的なマネジメントに取り組む。その後2年目から3年目にかけて、新エネルギー課風力政策室で、人材育成政策、国際交渉（EUや各国大使館との交渉）、国内のサプライチェーン構築に取り組む。その後、4年目から現職。生物化学産業課で再生、細胞治療、遺伝子治療担当として、様々な関連する研究開発支援や創薬ベンチャー支援に取り組む。特に、製造分野における自動化装置の開発支援政策や、CDMO等の製造基盤整備支援政策などを検討、立案している。